

外来診療担当表

平成26年5月1日現在

診療科	曜日	月	火	水	木	金	備考
総合内科	初診	北浦 剛	山本 哲夫	酒井 浩光	富田 桂公	森 正剛	
消化器内科		香田 正晴	藤井 政至	山本 哲夫	香田 正晴	松永 佳子	
		上田 直樹		上田 直樹			
呼吸器内科		富田 桂公	富田 桂公	山下ひとみ	北浦 剛	北浦 剛	
	再診のみ		交替医		酒井 浩光	山下ひとみ	
血液・腫瘍内科		但馬 史人	但馬 史人	但馬 史人	但馬 史人	但馬 史人	
循環器内科		森 正剛	福木 昌治	福木 昌治	森 正剛	福木 昌治	
	専門外来	ペースメーカー					【診療時間】13時～
糖尿病・代謝内科			木村 真理	木村 真理	木村 真理	交替医	
腎臓内科				福永 昇平			
神経内科						田中健一郎	
小児科	午前	林原 博	佐々木佳裕	坪内 祥子	林原 博	佐々木佳裕	
	午後	佐々木佳裕	坪内 祥子		坪内 祥子	坪内 祥子	【診療時間】15時～17時
	専門外来		佐々木佳裕 【アレルギー】	交替医 【乳児健診】	【特殊検査】	林原 博 【アレルギー】 【小児腎・膠原病】	【アレルギー】毎週火・金曜日 【診療時間】14時～17時 【乳児健診】毎週水曜日 【診療時間】13時～14時 【予防接種】毎週水曜日 【診療時間】14時～16時30分 【小児腎・膠原病】毎週金曜日 【診療時間】14時～17時
消化器・一般外科	専門外来	奈賀 卓司	杉谷 篤	久光 和則	杉谷 篤	山本 修	
	専門外来	杉谷 篤		杉谷 篤		杉谷 篤	腎移植・脾移植 第1,3週のみ・予約制 【診療時間】13時～16時
胸部・血管外科		鈴木 喜雅	鈴木 喜雅	鈴木 喜雅	(鈴木 喜雅)	鈴木 喜雅	
		若原 誠		若原 誠		若原 誠	
専門外来						リンパ浮腫 フットケア	【リンパ浮腫外来】 【フットケア外来】毎週金曜日PM予約制
整形外科	専門外来	南崎 剛	大槻 亮二	土海 敏幸	南崎 剛	吉川 尚秀	
	専門外来	土海 敏幸	吉川 尚秀		大槻 亮二		骨軟部腫瘍
	専門外来	南崎 剛			南崎 剛		関節外科外来
専門外来		吉川 尚秀					リウマチ
泌尿器科		高橋 千寛	(休診)	小林 直人	高橋 千寛	小林 直人	
放射線科		鳥取大学医師	田原 誉敏	杉原 修司	杉原 修司	鳥取大学医師	
心臓血管外科						交替医	第2週のみ
婦人科						交替医	
眼科			大谷 史江				
耳鼻咽喉科		山本 祐子		山本 祐子		山本 祐子	
歯科		中本 紀道		土井理恵子		奈良井 節	

時間 (初診受付) 8時30分～11時 (再診受付) 8時30分～11時 健康診断受付 予約制

国立病院機構 米子医療センター
〒683-0006 鳥取県米子市車尾4丁目17番1号 TEL.0859-33-7111(代) FAX.0859-34-1580(代)

診療情報提供書・FAX紹介状の送信は下記番号まで
FAX.0859-37-3931
(地域医療連携室直通FAX)

米子医療センターマガジン
あーかす #03 アーカス
May 2014
平成26年1月10日/初刊発行 平成26年5月12日/発行
発行/米子医療センター 〒683-0006 鳥取県米子市車尾4丁目17番1号 デザイン・印刷/合同印刷株式会社

無料0円

Yonago Medical Center Magazine ARCUS

あーかす

ご自由にお持ち下さい

¥0

米子医療センターマガジン #03
May 2014

心と言葉を虹の架け橋にのせ“伝える”“つながる”情報誌

特集 患者様に優しい医療を

新しくなる放射線機器

随時可能になりました!

緊急心臓カテーテル検査・治療

がんのリハビリテーション

患者様のよりよい療養や生活の質を支えるために

医療と介護の連携を深める

第1回 地域と医療の交換研修会実施報告

Topics File.002 最近のお惣菜のはなし

特集2 / 米子医療センター活動報告

学会に参加して

看護部からのお知らせ

Enjoy! 学生 LIFE

患者様に優しい医療を

米子医療センターでは、職員が一体となって常に患者様中心の医療を提供しています。今回は新病院建て替えにより、より患者様の立場に立った医療が提供できるよう新たに導入される機器の紹介や、よりよい療養や生活の質を支えるためのがんのリハビリテーションに取り組む様子などを紹介します。

放射線科では
血管撮影装置を除く、
ほぼ全ての放射線機器が
一新されます。

新規更新となる放射線機器は、デジタルX線TVシステム2台、デジタルマンモグラフィ装置1台、骨密度測定装置1台、歯科用デジタルX線システム1式、マルチスライスCT装置1台、MRI検査装置1台、核医学検査に用いるデジタルガンマカメラ装置1台、外部放射線治療装置1台です。骨密度測定装置については、旧機器の故障により本年2月より稼働開始となっています。

これら放射線機器の更新により、より質の高い画像を提供出来るものと考えています。新病院建て替え後も、これまで同様に放射線科へのご協力をお願いいたします。

ここでは、更新となるマルチスライスCT装置、MRI検査装置、ガンマカメラ装置、外部放射線治療装置について紹介します。



新しくなる放射線機器

放射線科医長 杉原 修司

contents

- 03 特集 患者様に優しい医療を新しくなる放射線機器
- 05 随時可能になりました! 緊急心臓カテーテル検査・治療
- 06 がんのリハビリテーション 患者様のよりよい療養や生活の質を支えるために
- 08 医療と介護の連携を深める 第1回 地域と医療の交換研修会実施報告
- 09 Topics File.002 最近のお惣菜のはなし
- 10 特集2/米子医療センター活動報告
- 12 学会に参加して
- 13 看護部からのお知らせ
- 14 Enjoy! 学生 LIFE



5月 今月の一枚

政木 昭夫 (米子市)

イワカガミの花は三の沢中腹あたりから多くなって梶尾根まで続き、登る程にピンクが濃くなってきます。ここも、他のお花畑の負けずにぎやか。この風景は、小雨の中、雲が上がるのを待って、尾根から西の頂上に向かい撮ったものです。



患者さまと職員が向き合った姿で、患者さま中心の医療提供とYONAGO(米子)の「Y」、MEDICAL(医療)の「M」、CENTER(センター)の「C」の文字を、まごころ、信頼、安心、良質の医療をイメージする「ハート」に組み合わせ「米子医療センター」の明るく元気な姿を表しています。

あーかす

あーかす(Arcus)とはラテン語で「虹」を意味し、英語のArc(弓、橋)+Us(私たち)で「私たちが地域の架け橋になる」という意志を込めてタイトルとしました。私たちの持ついろいろな表情を、地域の方々や医療関係者に広く知って頂き、絆を更に深める情報を掲載してまいります。

新病院建て替えにあたって 更新される機器

患者様に優しい検査が可能に

マルチスライスCT装置



これまで当院では検出器数16列のマルチスライスCT装置を用いて検査を行っていましたが、今回は検出器数64列のマルチスライスCT装置『Aquilion CXL』に更新されます。この検出器列数の増加により、より速く、より詳細な画像データの収集が可能となります。主な利点としては、これまでの装置では撮像が困難であった冠動脈のデータ収集が可能となります。データ収集後にワークステーションに画像データを転送することにより、冠動脈の3次元画像を作成することが可能となり、冠動脈の狭窄病変などを評価することが可能になります。また、この他に広範な3次元データをより速く収集可能となりますので、動脈系の評価であれば、造影剤量の軽減を図ることが可能となります。また、低被ばく技術の向上により、従来比で75%の被ばく低減効果が得られ、患者様に優しい検査が可能となります。

の機種ではほぼすべての撮像方法で騒音の低減が可能となっています。本体の強力な傾斜磁場システムを利用した画質向上に加えて、MRI信号を収集する受信コイルの性能も向上しています。今回の機器更新にあたっては乳腺コイル・関節用コイルなどの専用コイルも数多く用意いたしました。これにより、関節などの細かな部位でも診断に有用な高画質の画像を提供できます。また、躯幹部用のコイルも軽量化されており、こちらも患者様の不快感を軽減できるものと考えています。

病変部位の特定がより容易に

ガンマカメラ装置



核医学検査ではデジタルガンマカメラ装置『Symbia E』へと更新されます。現病院にて使用している核医学検査装置は平成6年3月に導入された機器であり、間もなく20年を迎えようとしています。メーカーからも故障が生じても代替部品がないと言われて

いた機種でもあり、まさに念願の機器更新となります。今回の機種では、CTなどで撮像された画像に核医学検査で得られた画像を重ね合わせる事が可能となり、病変部位の特定がより容易となります。

より制度の高い放射線治療へ

外部放射線治療装置



外部放射線治療装置は『Synergy』へと更新されます。これはIGRT（画像誘導放射線治療）が可能な放射線治療装置です。IGRTは照射の直前や照射中にX線画像などを利用して、照射が正しく行っているのかを確認し、画像情報から照射位置のずれ量を求めて寝台位置の修正を行うことが可能となる高精度な治療方法です。これにより、より精度の高い放射線治療を行うことができます。また、この機種は将来的にはIMRT（強度変調放射線治療）が可能な機種へのバージョンアップも可能となっています。

騒音の低減が可能

MRI装置



MRIでは1.5Tの『Magnetom Avanto』へと更新されます。MRIでは検査中の騒音が不快・不安の一因となっていました。こ

電子カルテ稼働

また新病院建て替えによる電子カルテ稼働にもなって、これまでのフィルム運用からフィルムレス運用となります。新病院で撮像された画像は電子カルテのモニターで参照していただくようになります。現病院で撮像された2007年12月以降のCT・MRI・RI画像についても電子カルテ上で参照していただくことが可能であり、以前との比較読影も簡便に行

うことができます。これに加えて、胸部・腹部単純X線写真、整形外科領域のX線写真も2013年11月以降に撮像されたものについては電子カルテ上で参照可能となっています。電子カルテに搭載される診療支援統合ソフトにより、より操作性が高く画像参照が行えるものと考えています。

随時可能になりました!

緊急心臓カテーテル検査・治療



米子医療センター
循環器内科
福木 昌治

当院循環器内科は5年前の平成21年4月より入院診療を再開し、福木昌治1名で診療を行って参りましたが、平成24年6月より森正剛医師が加わり2名による診療体制となり循環器診療の充実を図ってきております。循環器外来

診療としては、平日毎日午前中の外来診療と、月曜日午後専門外来としてペースメーカー外来を行っています。循環器専門診療として、虚血性心疾患に対するカテーテル検査、治療を中心に、徐脈性不整脈に対するペースメーカー治療、頻脈性不整脈に対するカテーテルアブレーション治療などを行っています。また、循環器救急疾患への対応として原則24時間診療を行っていましたが、緊急心臓カテーテル検査・治療については平日のみの対応でした。しかし平成26年4月より、土日祝日を含め原則24時間365日、緊急心臓カテーテル検査・治療を行える体制となりました。新病院では冠動脈CTも稼働予定で、益々循環器診療の充実を図っていきたいと思います。

がんのリハビリテーション

患者様のよりよい療養や生活の質を支えるために

リハビリテーション科 理学療法士長 日浦 雅則



がんのリハビリテーションの背景

近年、がんの診断や治療の進歩により、がんの治療成績は年々向上しています。また、進行した状態で診断されても、薬物療法などの治療を続けながら長期に療養生活を送ることができるようになった現在、よりよい療養や QOL（生活の質）を支えるがんのリハビリテーション（以下、がんのリハビリ）の重要性が高まっています。平成 22 年には「がん患者リハビリテーション料」という施設基準が新設され、がんのリハビリに取り組む医療機関が増えてきました。施設基準の取得には規程の研修を修了する必要がありますが、当院も昨年 6 月に医師、看護師、リハビリスタッフのチームで研修会に参加し、念願であったがんのリハビリの施設基準を取得することができました。



研修会参加スタッフ

がんのリハビリテーションの基本的概念

がんの患者様は、筋力や持久力の低下、歩行障害、日常生活動作の問題など入院生活による活動量の減少から生じる一般的な問題、および疼痛、リンパ浮腫、末梢神経障害、運動麻痺などがそのものによる特別な問題が生じることがあります。これらの問題に対して、二次的障害を予防し、運動機能や日常生活動作の低下予防・改善を目的としてリハビリを行います。

リハビリの内容は、筋力強化練習や関節可動域練習、歩行練習、日常生活動作練習など、他のリハビリと大きな違いはありません。特徴としては、化学療法や放射線療法などの治療と平行して行われることが多く、痛みや気分不良など日々または時間で変化する症状に応じて適切なリハビリを実施することです。そのためには医師、看護師など、他の職種と協同でリハビリを提供することが重要となります。また、診断された早期からどのような病状や状況、時期でも行われることも特徴です。図に示すように、予防的、回復的、維持的および緩和的リハビリの 4 つの段階に分けることができ、それぞれに目的や役割があります。

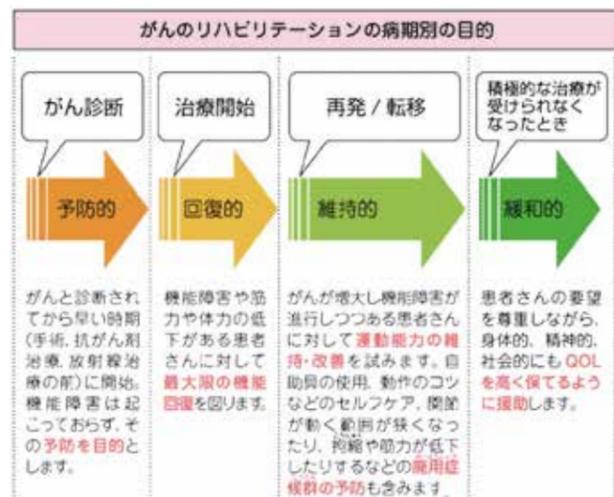


図. 治療や療養の時期におけるがんのリハビリテーション (国立がん研究センター がん情報サービス ganjoho.jp より引用)

当院におけるがんのリハビリテーションの取り組み

当院リハビリテーション科では様々な診療科から紹介を受けたがん患者様に対して、運動機能や日常生活動作の低下予防・改善を目的としてリハビリテーションを実施しています。肺がんや胃がん、大腸がんなどの手術においては、手術前から開始し、手術後も翌日より病室で早期リハビリを行います。また、肺がんや造血器がんの化学療法・放射線療法施行患者様に対しては、治療と平行してリハビリを実施します。

Case1.造血器がん患者様の例

造血器がん患者様は化学療法による副作用や無菌室での身体活動量の減少により体力低下、柔軟性低下、心肺機能低下など重度の廃用症候群が生じる危険性が高いとされています。当院では、自転車エルゴメータや踏み台運動などの運動療法を積極的に実施することにより廃用症候群を予防し、早期退院・早期社会復帰を実現することを目的に、入院から退院まで継続したリハビリテーションを行っています。(写真 1.2)



写真 1

Case2.肺がんによる肺切除術施行患者様の例

肺切除術を行うと、痛みや麻酔の影響で呼吸が浅くなり、痰がうまく出せず、肺の合併症を起こす可能性が高くなると言われています。当院では、手術の前から深呼吸や痰の出し方の練習、呼吸筋トレーニングなどを実施し、合併症予防に努めています。手術後は肺の合併症予防に加え、全身の廃用症候群予防のためにも早期離床(病状が落ち着いた状態の早い時期に寝たままではなく、ベッドから起き上がること)に取り組んでいます。(写真3)



写真 2

血液腫瘍内科病棟におけるリハビリテーション

最後に

最近では包括的リハビリテーションという概念が標準化しています。その内容は運動療法のみがリハビリではなく、患者教育、生活指導、カウンセリングもリハビリに含まれ、関連する職種はリハビリスタッフだけではないというものです。がんのリハビリについても主治医、リハビリ医、看護師、薬剤師、栄養士など複数の職種と連携することにより、大きな改善効果が期待できると考えています。

当院では、今後もがん患者様のよりよい療養や QOL（生活の質）を支えるために、他部門と協力し、患者様とご家族をサポートしていきたいと思っています。



写真 3

術後のリハビリテーション

QOLとは…

QUALITY OF Life のことで、「生活の質」と訳すのが適切な場合が多いです。治療や療養生活を送る患者さまの肉体的、精神的、社会的、経済的、すべてを含めた生活の質を意味します。病気による症状や治療の副作用などによって、患者さまは治療前と同じようには生活できなくなることがあります。QOLは、このような変化の中で患者さまが自分らしく納得のいく生活の質の維持を目指すという考え方です。(国立がん研究センター がん情報サービス ganjoho.jp より引用)



医療と介護の連携を深める

第1回 地域と医療の交換研修会 実施報告

地域連携室MSW 田中 聡子

平成 26 年1月 17 日（金）ホテルサンルート米子にて、在宅医療拠点事業の一環である、医療と介護の連携を深める事を目的として、「第1回地域と医療の交換研修会」を開催しました。

昨年行った米子市包括支援センターとの懇親会や、ケアマネアンケートで要望の多かった研修の中から、DPC（診断群分類包括評価）についての勉強会と、医師との意見交換会を実施しました。



山本副院長の挨拶の後、高橋診療情報管理士より「DPCについて～病気と入院期間の目安～」講演をして頂きました。濃厚治療や在院日数の超過を防ぎ、効率的な治療を行う事がDPC病院に求められている。そして今後ますます地域との連携が求められ、地域包括ケアへのシフトが重要になってくるという説明がありました。



その後、山家先生と田本先生に参加して頂き、包括支援センターや、ケアマネージャーさんとの質疑応答を行いました。

主治医意見書の記載についての要望、緩和ケア病棟との連携、レスパイト入院を考えて頂きたい等忌憚のない意見や質問が出ましたが、終了後のアンケートでは「DPCの説明がわかりやすく理解できた」、「在院日数を少なくしないといけない理由が分った」、「先生の率直な意見が聞けて、医療と介護相互の立場を理解することの必要性を感じた」、「他職種が連携し、地域とも連携を図ろうとしている良い病院と感じた」、「緩和ケア病棟と在宅ケアマネの連携について勉強したい」等…、医療施設での研修に対して好意的で積極的な感想が多くみられ、連携についての意識が高く、緩和ケア病棟への期待も大きいと感じました。今後も研修を企画して行く予定です。皆様のご理解とご協力を宜しくお願い申し上げます。



栄養管理室長
管理栄養士
藤原 朝子

最近のお惣菜のはなし

◇「中食」って、ご存知ですか？

「外食」は、誰もが知っている言葉ですが、最近では、「中食」という言葉があります。

中食とは、家庭外で調理・加工された食品を家庭や職場等へ持ち帰り、そのまま食事として食べられる食品の総称をいい、具体的には市販の弁当やお惣菜等があげられます。

核家族化による単独世帯の増加、夫婦共働き家庭の増加により、スーパーやコンビニ等の弁当やお惣菜の利用率も年々増加しています。

一般生菌数が基準以下に抑えられるように、グリシンや、pH 調整剤等を利用したり、一定の時間を過ぎたものは廃棄処分するなど管理しています。消費期限の設定は製造業者や加工・販売業者の責任に委ねられていますが、店頭販売など、あらかじめ容器包装されていないものや、注文に応じて容器に詰められるものは、消費期限などの表示義務がありません。食品の細菌汚染の度合いは、調理従事者の衛生管理、調理施設の設備や清掃状況、食品の保管方法等によって左右されるので、衛生管理の確かな店を選択することが大切です。

コンビニの冷蔵コーナーにも、ハンバーグ、さばの味噌煮、ポテトサラダなど様々なクックチルを利用した惣菜が並んでいます。衛生的に調理・包装・温度管理された商品は、食品添加物の使用量の低減または不使用が可能となり、かつ、一定期間の保存が可能です。メニューが限定されにくく、商品の幅も広がります。消費期限の延伸により、期限切れによる廃棄ロス、配送回数を減らせ、コスト削減が可能になります。食品添加物問題や環境保護の面からみてもメリットがあり、チルド惣菜・弁当も増加しています。

◇惣菜や弁当の衛生管理

腸管出血性大腸菌やノロウイルスによる食中毒など「食の安全」に関するニュースが多々取り上げられていますが、普段利用するスーパーやコンビニ等のお弁当やお惣菜はどのような衛生管理をされているのでしょうか？

弁当やお惣菜は、加熱等の処理をすることなくそのまま食されるものであること、その製造等については特に衛生上の配慮が必要とされることから、厚生省により「弁当及びそうざいの衛生規範」が定められ、営業者は自ら努力するよう促されています。

主な食中毒は細菌が一定数以上に増殖すると発症します。細菌の増殖を抑える方法として、低温保存が一般的ですが、通常、弁当やお惣菜は、常温（15～25℃）で陳列されています。このため常温で保存しても、



◇中食利用のメリット・デメリット

中食の利用は、食べたいものを少量ずつ購入できたり、種類が豊富で手軽に利用できることから、家事の負担を軽減することができるため、利用者が増えています。

しかし、惣菜コーナーに並ぶ商品は、コロッケ、鶏のから揚げなどの揚げ物や、肉料理、おにぎり・サンドイッチ・寿司などの炭水化物が中心です。冷めても美味しく食べられるように味の濃い料理や脂肪を多く含む料理が多く、本人が認識できないまま食塩や脂肪の摂取量の増加につながりやすいことが欠点です。中食の利用者が増加する現在、容器包装されていない加工食品にも栄養成分などの表示の普及が進み、消費者が工夫して中食を利用できるようにしてもらいたいものです。

◇チルド品の普及

最近では、食品添加物使用量の低減のため、大手の弁当製造工場では衛生管理の行き届いた設備を整え、菌数の少ない状態の弁当を製造し、配送中も菌数が増えないように5℃前後で管理することで、消費期限の長い弁当やお惣菜の販売も行っていきます。いわゆるクックチルを利用したものです。

米子医療センター活動報告

米子医療センターでは、患者様へよりよい医療提供ができるよう各種講演や研修会などを主催したり、外部講演、研修会などにも積極的に参加しております。また、資格や認定取得などにも取り組み、患者様のご期待に添えるよう努力を行っています。



活動報告



がん放射線療法
看護認定看護師

認定看護師として期待されること

がん放射線療法看護認定看護師 田村 泉

「こちらの放射線科には認定看護師さんがいるんですね」と放射線治療で紹介となってこられた患者様に言われることがあります。認定看護師という存在をご存知の患者様もいらっしゃるんだなあと驚きを感じます。と同時に、患者様は認定看護師にどんなことを期待されているんだろうと考えてしまいます。

がん放射線療法看護認定看護師として活動を始めて2年目ですが、多くの課題を自覚しつつも、自分自身がどう行動すべきか模索する毎日です。

院内外の看護との連携も課題のひとつです。患者様が当院に入院していても、他院に入院していても同じように情報提供ができるよう努めなければいけないと感じています。そのために、院外に向けた看護連絡票の運用準備を始めました。

院内向けには放射線治療患者連絡票や電話連絡、病棟訪問などを行っていますが、不十分なこともあるかと思えます。皆様からのご意見を頂きながら、よりよい方法を検討していきたいと考えています。そして、患者様が安心して放射線治療を受けることができるような環境づくりを行うことで、少しでも患者様のご期待に沿いたいと思います。

認定看護師とは…

日本看護協会の審査に合格し、ある特定の看護分野において、熟練した看護技術と知識を有することを認められた看護師のこと

活動報告



糖尿病療養検討会

患者様の安全を守るために

皮膚・排泄ケア認定看護師 古志 知春

糖尿病教室稼働に向け、昨年6月より糖尿病・代謝内科木村真理先生を中心に栄養管理室、リハビリテーション科、臨床検査科、薬剤科、病棟・外来看護師などのコメディカルスタッフがチームとなり活動を開始しました。稼働にあたり、まずは、コメディカルスタッフが糖尿病に関する知識を得る必要があったため、毎月糖尿病療養検討会で勉強会を開催することから始めました。1月より糖尿病教室を開催し、第1回目は6階病棟、第2回目は4階病棟で行いました。これまでにやってきた主な内容として、看護師から「フットケアについて」、栄養士から「食事療法について」、理学療法士から「運動療法について」です。フットケアでは糖尿病性足病変、足の観察やスキンケアの方法などを指導し、食事療法では糖尿病の合併症と炭水化物摂取について、運動療法では、簡単な運動方法について各分野の担当者がそれぞれパンフレットをもとに指導を行いました。糖尿病教室に参加された患者様からは、「足の先まであまり見たことがなかった」「注意して予防していきます」「巻爪はどのように対処したらいいのですか？」などの質問や感想を頂き、和やかな雰囲気の中、糖尿病教室を行うことができています。糖尿病療養検討会は、稼働し始めたばかりで、多くの課題をクリアしながら、糖尿病患者様に適切な知識を提供し、自己管理に必要な知識の習得に向けたサポートチームとして今後も取り組んでいきたいと思えます。

研修会開催



医療安全研修会
「KYT」

患者様の安全を守るために

医療安全管理室 上野 三和子

2月25日、医療安全研修会「KYT」を開催、63名の参加がありました。KYTとは、危険予知トレーニングといい、危険に対する感受性を磨く訓練のことです。患者様の安全を守るセーフティマネジメントで、同様のヒヤリハット・事故が繰り返し起きている現実に突き当たり、その打開策を求めて取り入れられました。

KYTの目的は、医療現場における危険の3つのポイント

1. 医療者の不適切行為（ヒューマンエラー）
2. 不安全な環境や設備の状況
3. 患者の不安全な状態や危険行動

これらに対するリスク感受性を高め、さらに物事への集中力、問題解決能力、実践への意欲を高めることです。

研修では、KYTについて説明後、9つのグループにわかれ「KYT基礎4ラウンド法」の演習を行いました。

各部署からの参加があったため、それぞれの視点での危険ストーリーがたくさんでました。各グループ、他者の意見を真剣に聞き、コンセンサスを得ながら4ラウンドまで検討することができました。

最後に、グループ全員で重点実施目標を指さし唱和して終了しました。参加された方が中心になって、KYTが現場で継続実施されるよう支援していきたいと思えます。

外部研修



臓器移植ネットワーク(NW)
西日本支部
移植検査センター研修会議

判定基準の統一に向けて

臨床検査技師 西尾 崇矢

当科は鳥取県唯一の日本臓器移植ネットワーク移植検査センターに指定されており、献腎移植待機へのNW登録患者様の移植関連検査を業務としています。

移植関連検査においても近年の検査技術の発展により高精度、高感度法が登場し、臨床へ大きく貢献しています。

しかしながら、移植関連検査領域では、試料の測定法や、測定結果の判定基準等が全国的に統一されるに至っておらず、現在検査法の統一化が図られてはいるものの、各施設が独自の方法、基準で検査を行っているのが現状です。

そんな中、我々NW西日本支部移植検査センターでは以前より測定法の均質化、判定基準の統一に向けて研修会議を独自に実施し、西日本の移植検査の質の向上に努めてきました。

今回の研修会議でも各施設から活発な討議が行われ、当科としても今後の検討課題や新たな知見を得ることができ、実りの多い会議となりました。

この実りを活かし今後も鳥取県の移植検査センターとして検査の質の向上に励みたいと思えます。

学会に参加して

第31回日本ストーマ・ 排泄リハビリテーション学会

開催概要

学会名／第31回日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会総会
 テーマ／「ストーマ・排泄ケアの経験と科学」
 会長／舟山 裕士
 (東北労災病院 副院長、大腸肛門外科)
 会期／2014年2月21日(金)・22日(土)
 会場／仙台国際センター
 事務局／東北労災病院 外科・大腸肛門外科 〒981-8563 仙台市青葉区台原四丁目3-21



皮膚・排泄ケア認定看護師(WOCN)
古志 知春

2月21・22日に宮城県仙台国際センターで開催された第31回日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会で発表(ポスターセッション)をしました。テーマは、「重度のストーマ周囲皮膚炎を合併したストーマ保有高齢者との関わり」で、20年近く、ストーマ管理のサポートを受けられず、独自の方法を行っていた方との関わりです。

この事例を通じ学んだことは、誰のサポートも受けず、様々な苦勞と努力を重ねながらストーマ管理を行ってきたストーマ保有高齢者の場合、新たなストーマ管理を習得することの精神的ストレスは図り知れないものがあり、ストーマケア指導の際、プライドを傷付けてしまう可能性もあります。そのため、WOCNは、ストーマ保有者の訴えを傾聴し、その間の表情変化もしっかり捉え、一方的な発言にならないよう注意しながら、説明の内容やスト-

マケアの指導のタイミングを考慮すること、そして、常にストーマ保有者の一番近い存在になれるよう努力することが重要であると学びました。長年、ストーマケアに携わっていますが、ストーマ保有者の方から学ぶことは多く、日々、研鑽することを忘れてはいけなと痛感させられました。

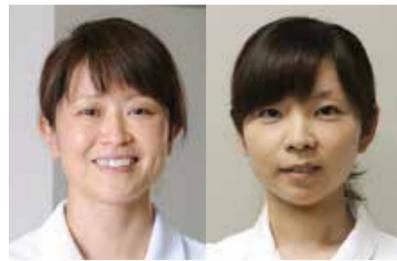
東日本大震災発生から3年が過ぎましたが、仙台市内は思った以上に活気があふれ、学会会場内も、積極的な意見交換が行われていました。また、震災を機に、ストーマケアに関する災害対策の取り組みも数多く発表されていました。鳥取県西部地震を経験している私たちも災害に備えストーマケアのサポート体制を整えていく必要があると思いました。

余談になりますが、仙台はとておいし土地柄で、特に仙台駅内の牛タン通りにある牛タン炭火焼き利休の「極上牛タン定食」と喜久水庵の抹茶大福もちがとてもおいしかったです。仙台に行かれる機会がありましたら、是非、食べてみてください。

第36回日本造血細胞 移植学会総会

開催概要

学会名／第36回日本造血細胞移植学会総会
 テーマ／「造血幹細胞移植の最適化」
 会長／岡本 真一郎
 (慶應義塾大学医学部 血液内科教授)
 会期／2014年3月7日(金)～9日(日)
 会場／沖縄コンベンションセンター
 事務局／慶應義塾大学医学部 血液内科内 〒160-8582 東京都新宿区信濃町35



5階病棟
濱田のぞみ 西村 祥子

□演で1題「食事指導を受けた造血幹細胞移植後患者のQOLと適切な食事指導についての検討」とポスターセッションで1題「造血幹細胞移植患者への写真付きパンフレットを用いた口内炎の説明とその有効性の検討」を発表してきました。造血幹細胞移植を受ける患者は、移植前からはもちろん、移植後の看護支援もとても大切になってきます。他施設からは、発表に対する質問もたくさん戴きました。米子医療センターの取り組みも年々レベルアップしていると、学会に参加することで感じています。今後も研究を通じた根拠のある看護実践を実施していきたいと強く思うことのできた時間となりました。そして、沖縄の美味しいものに囲まれました。参加メンバーと米子から離れた土地で、食事をするのも、私の大きな楽しみとなっています。

看護部からのお知らせ



看護の心をみんなの心に

看護の日

米子医療センター

看護の日

フェア 2014

5月17日(土)

9:30～12:00

EVENT

イベント

- 測定 血圧・体脂肪・骨密度・血管年齢
- 相談 健康・お薬・栄養・介護
- リハビリ体操
- ミニコンサート(フルーツ演奏) 11:15～11:45
- めだかすくい



開催場所

米子医療センター 2階会議室

〒683-0006 米子市車尾4丁目17番1号 TEL.0859-33-7111



教員 遠藤 裕子

卒業おめでとう!

看護師としてのスタート 第45回生 卒業式を終えて

3月4日多くの来賓の方や病院職員、保護者や後輩たちに見守られるなか、45回生46名が卒業いたしました。ご多忙のなか、多くの方に卒業式・謝恩会にご臨席いただき、ありがとうございました。また、至らぬ点が多々あったことと思えますが、温かく見守っていただきましたことに深く感謝いたします。

45回生は1年生のころから反応が薄く、主体性に欠けるところがありました。そのため、ご講義いただいた先生方にもご迷惑、ご心配をおかけしたと思えます。しかし、46名ひとりひとりが、忙しいなかでも周囲を見渡してクラスメイトを気遣いながら3年間を過ごしていき、反応することや主体的に行動することの意味を学んでいきました。人を気遣い、人のために何かしたいという強く優しい気持ちから「ボランティア活動をしたい」と声を発して活動を始めました。人のことを思う力を行動に変えることのできる45回生は、その姿を後輩に示していき、ボランティア活動は引き継がれています。



3年間たくさんの患者さんとご家族の思いや優しさに触れて、様々なことを教えていただき、成長することができました。また、看護師をはじめとする多くの方から、時に厳しく、時に優しくご指導いただき、看護・医療に対する学びにとどまらず、少し苦手としていた社会性も身に付けていきました。45回生にとって、ひとりひとりとの出会いがかけがえないものであり、その出会いに感謝しています。そして、そのひとつひとつの出会いがこれからの46名を支え続けてくれることと思います。

45回生は看護学校を卒業しましたが、看護師としてはこれからがスタートです。何事にも感謝し、相手を気遣う気持ちを忘れずに、誠実に看護と向き合っていくことを願っています。まだまだ未熟な46名ですので、引き続きご指導のほどよろしくお願い致します。



幸せな気分になる関わりを ふれあいワークショップ



本校では、看護師を目指すものとして大切な人と人との関係づくりを学ぶ多くの機会があります。1年時には水野正憲先生による「人間関係論」の講義で学びます。私たちはこれまで、様々な実習や行事を通して、多くの人と協力し合う為にはコミュニケーションが大切であることを実感しています。そして今回、2月17日と18日に、緑水園にて水野正憲先生による「ふれあいワークショップ」の宿泊研修を行いました。

コミュニケーションが
大切!

附属看護学校 46回生
渡部 誠



ワークショップでは、人と人が接していく中で大切になってくるコミュニケーションの力、そして自己や他者の良い点を見つけ出していくことの大切さ・素晴らしさを学ぶことができました。特に私たちが目指していく看護の世界では、物事をマイナスに考えてしまうとその考えが相手にも伝わってしまい、お互いにとって良い影響を与えることはできないと思います。ワークショップの活動の中で、クラスみんなの良い点を書いて渡すというを行いました。私も、クラスみんなの良い点を書いているうちに、個人個人の素晴らしさを改めて実感し、感謝の心がひびひしと湧いてきました。また、みんなと共にいる今の自分がとても幸せに感じることもできました。

この先も様々な実習でいろいろな方と接する場面がたくさんあります。今回のふれあいワークショップで学んだことをもう一度見つめなおし、自分にとっても、そして相手にとっても幸せな気分になれるような関わりをしていきたいと思えます。

基礎看護学実習Ⅱを終えて

先生の立場から



教員 木原 千絵

看護過程の実習で学生は、患者さんの情報を整理し、アセスメントして抽出した問題が正しかったのか、立案した計画に基づいた援助が患者さんにとって妥当であったか悩み追加修正しながら、よりよい看護を追及していくことを体験の中から学ぶことができました。この過程で、学生は病態や治療・検査の理解の大切さを実感し、臨床でめまぐるしく変化する患者さんに必要な援助をするためには、学内と臨地での学習を結び付けることが重要であると気づくことができました。看護場面では、学生が患者さんと誠実に向き合い努力する姿から、この1年の看護師としての成長を感じることができました。そして、実習後の「クラスカンファレンス」の学びも踏まえて、学生は患者さんを思うやさしい気持ちを、その人に合わせた根拠に基づいた看護の実践に繋げていきたいとの思いを強くしています。私も学生のその思いを支えられるようこれからも精一杯支援していきたいと思えます。

生徒の立場から



47回生 遠藤 嘉了

初めての3週間実習でこんなに長い期間やっていけるか、はじめは不安でした。しかし、患者さんとのコミュニケーションや援助、患者さんの疾患について勉強し理解していくことで、徐々に不安から充実感へと変わっていきました。

私は受け持たせて頂いた患者さんに、胸腔ドレーンが挿入されている状態から、抜去まで関わりました。看護過程の展開では、カルテや患者さんとのコミュニケーションから得た情報を、

ヘンダーソンの14項目に分けて書き、アセスメントに基づいて全体関連図を書くことで情報が整理でき、患者さんのニーズの充足、未充足を判断し、看護問題を見出し、看護計画を立てることができました。そして、計画に基づいて必要な観察を行いながら、ドレーン挿入中・抜去後の援助を実施することができました。患者さんは回復過程にありましたが、CRPは少し高く炎症の再燃の可能性があります。このアセスメントから口腔ケアや手洗いなど感染予防の援助の必要性に気づくことができました。

また、カンファレンスで計画の立案と評価について話し合うことで、具体的な計画の立て方、書き方、実施後の評価について学ぶことができました。今回は患者さんが早くに退院されたので、計画の実施が十分できなかったのが、次回からは情報収集から計画立案までを短期間でやり、援助を実施し、患者さんの反応から評価していきたいです。また、計画を書く際は、他の人が見ても同じ看護を実施できるよう、具体的に表現していきたいです。この体験から、臨床では患者さんの状態は刻々と変化していくので現在の事ばかり考えるのではなく、その方の過去、現在、未来の生活を考えながら関わらなければいけないと感じました。

今回の実習を通して、看護師の仕事というものがどういうものか、少し理解することができました。今回学んだことを次の実習に活かしていき、看護を深く学んでいきたいと思えます。